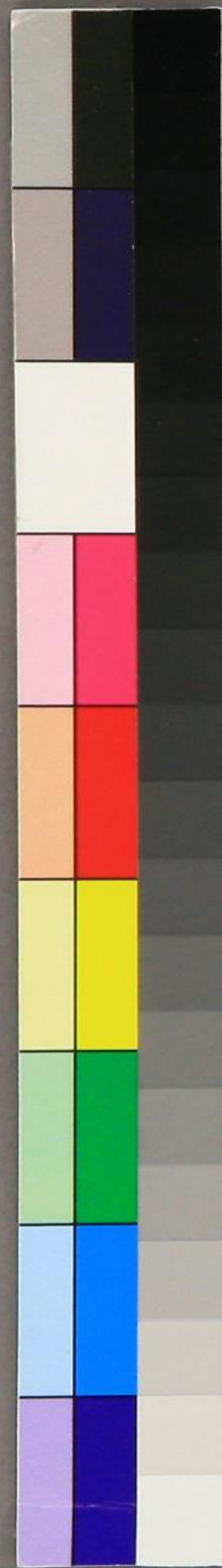


二酉志

坤

特別
14
1919
665



皇清同治六年



門 12
號 2465
卷 2

門 14
號 1919
卷 51

○宋本の缺字左の如し

趙眺 唐昭都令 挺 唐御史中丞 敬 汝州刺史 弘殷 月檢校司徒岳州防禦使

太祖 諱玄朗初名光胤唐匡亂 太宗 吳初名義政賜長 真宗 恒 仁宗 顥

名貞 英宗 諱實 神宗 顥 哲宗 煦 徽宗 佶

欽宗 諱亶 高宗 構 孝宗 春 光宗 熈 寧宗 擴

理宗 諱昀 度宗 禔 恭宗 點 端宗 昀

又左の如きもの類々ありて缺字あり

勢弘能匡貞徵等

早稲田大學圖書印

昭和三十年
六月九日
購求

○二階本、字局本、複床本 也安守寺の正當者
 考ふるに、俗に二階本（明末御監課某の本に於
 の上格を居る）と云はれ、余今之を以て正當
 本とす。舊唐志を校ふるに、整好以本を以て之、又
 邊準外、界欄を没するも、下邊の界下、一格を没
 するも、余今舊唐志を校ふるに、名に復床本とす。
 ○石任の篇題の録者、其字を墨洞とす。其
 古者書卷、一編題
 又從篆隸、其下文異體謂之編題者、此題是觀其書
 法、其とあり。

○墨洞 式百枚の石任を帝下のを沈めて、指を連ね、其の
 洞状をなす、と云ふ、墨洞の名あり。

未齊余元刻考略云、國子寺石任在西安府儒學の
 倫也、之後東西長廊、其下、故稱墨洞云。

○石任の削成、年中の稿、刻するも、後天祐年中、移して
 正當なる、其の正當者、移る、石任の題、其を叙する
 詳し。

京兆府、府子汲郡呂公新移石任記、其
 石任乃削成中、稿刻、唐史載文宗時、大子勅
 石任而鄭覃、其肉、墀、等、校之、其文字上、石自天祐中

唐昭宗の年號 韓建築新城、石徑畫委于地、至朱梁時、劉鄩守長安、有表吏尹五羽者、白鄩請犇入城、鄩方備岐軍之侵軼、謂此非急務、五羽給之曰、一旦賊兵臨城、辟為矢石、亦足助敵為虐、鄩然之、乃遷置于此、即唐尚書省之西隅也、地雜民居、其處六注下墮、三階仆、歲久折缺、呂公欲徙置于府子之北墻、遂視因余沒、凡石刻之僮者、仆者、悉犇置于此、地始于元祐二年、初秋、盡于冬、而後成、門序書啓、雙亭中峙、廊廡回環、不崇不卑、誠故都之壯觀、翰墨之淵藪也。

○重言重意を所する中におもむくべき試のほろりたる俗者と
 入るべきことと正言正意を所する事

重言重意本と帖括の古くして宋末の俗本を何人の輯ることとありし其本をくくると言義の後、墨匡を設て重言又重意又互注と標し其あり其説を夾注と標し其義考の以墨匡互注毛詩の下陸元輔が論を載せ云来左傳三禮有及于詩者為互注、又標詩句之句者為重言、詩名之句者為重意、蓋唐末人帖括之書也。

○帖括の古くして其を文獻ありし其のこゝに記す
 唐制帖經試士後以应试者多、至帖經率絕言以惑之

のら出た語釈のみを三浦えとてその因を究るに直ぐ
長谷川泰とん二の因を究るに直ぐ一は後い出
川とんりもつてあるおのりある因を究るにその
を二の因を究るに直ぐ一は仰つたこと
いふもその因を究るに直ぐ一は自分か二の因を
究るに直ぐ一は確く信じてその因を究るに直ぐ一
お説七の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
二の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
三の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
四の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
五の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
六の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
七の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
八の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
九の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて

琳瑯とんりもつて一は長谷川とんりもつて
二の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
三の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
四の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
五の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
六の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
七の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
八の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
九の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十一の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十二の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十三の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十四の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十五の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十六の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十七の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十八の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
十九の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて
二十の因を究るに直ぐ一は長谷川とんりもつて

辨其本之真惡校其偽謬也

○古本の名を案するは誤と決する者なきつて之を云ふは
先づ之を多くして供力するは誤る左の如く心あり

巨部	版心	版式	整版
影本	覆本	刷畫	印本
晒本	鈔本	識語	隱括
卷子	揮架	鈔板	單行
私板	坊刻	板端	重刻
景刻	監本	俗本	板匡

夾注	寫様	整書	闕冊
罕觀	希觀	宋槧	鑄版
贗本	散揮	墨匡	收儲
摺本	改籍	搜訪	玩索
摹印	點竅	監板	亂刻
缺殘	零本	萃本	倒置
遺本	入梓	撫印	雙行
空行	提款	格頂	原式
爛脫	單邊	雙邊	

早稲田大學圖書印

早稲田大學圖書印

○是のちの書肆にうゝ五山板と稱して海島詠賦二書を
そつつけんた、よくそつと五山板をそつたが版式書
体七寸而各ういゝのむ其の若否の誰んをそつと
よく思つてそつと尾崎維素の長年古目一説を
歸して全るそつと比、即ち若否を席関わぬ其
所の海島詠賦とそつとそつと入梓して縁をそつと海島詠
賦とそつとそつとついでにそつとそつとそつと

○山井鼎の撰む比七証をそつとそつとそつと中集
支那人の撰む比七証をそつとそつとそつとそつと
そつとそつとそつとそつとそつとそつとそつとそつと

と書して此本を掲げたりと云ふ事

○若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と
云ふ事

若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と
云ふ事
上の括へんは
若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と
云ふ事

いと拙き人の手なれども目録と云ふ事
若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と云ふ事
若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と云ふ事
若家弟集の集の上下二巻若家首の括へん
たしよのしと傳へしと云ふ事
いと拙き人の手なれども目録と云ふ事

○^{三十八}の珠箔を^{三十九}飾り^{四十}あ^{四十一}り^{四十二}十七^{四十三}史^{四十四}を^{四十五}七^{四十六}部^{四十七}辨^{四十八}の^{四十九}れ
こ^{五十}ろ^{五十一}毛^{五十二}氏^{五十三}の^{五十四}稿^{五十五}刻^{五十六}し^{五十七}た^{五十八}汲^{五十九}古^{六十}閣^{六十一}版^{六十二}に^{六十三}あ^{六十四}る^{六十五}即^{六十六}ち^{六十七}母^{六十八}の^{六十九}書
る^{七十}出^{七十一}張^{七十二}を^{七十三}て^{七十四}あ^{七十五}る^{七十六}初^{七十七}摺^{七十八}と^{七十九}え^{八十}し^{八十一}て^{八十二}版^{八十三}と^{八十四}の^{八十五}目^{八十六}の^{八十七}元
め^{八十八}る^{八十九}所^{九十}の^{九十一}辨^{九十二}朗^{九十三}が^{九十四}あ^{九十五}る^{九十六}各^{九十七}冊^{九十八}の^{九十九}汲^{一百}古^{一百一}閣^{一百二}の^{一百三}末^{一百四}印^{一百五}に
捺^{一百六}し^{一百七}て^{一百八}あ^{一百九}る^{二百}史^{二百一}記^{二百二}の^{二百三}始^{二百四}り^{二百五}は^{二百六}錢^{二百七}湯^{二百八}壺^{二百九}の^{三百}序^{三百一}より^{三百二}あ^{三百三}る^{三百四}
又^{三百五}毛^{三百六}氏^{三百七}の^{三百八}え^{三百九}ん^{四百}と^{四百一}十三^{四百二}帖^{四百三}を^{四百四}刻^{四百五}し^{四百六}て^{四百七}田^{四百八}東^{四百九}と^{五百}甚^{五百一}い^{五百二}話^{五百三}七^{五百四}載^{五百五}
つ^{五百六}て^{五百七}そ^{五百八}の^{五百九}又^{六百}每^{六百一}冊^{六百二}文^{六百三}政^{六百四}某^{六百五}年^{六百六}一^{六百七}某^{六百八}月^{六百九}日^{七百}の^{七百一}納^{七百二}て^{七百三}は^{七百四}録
夏^{七百五}長^{七百六}日^{七百七}取^{七百八}の^{七百九}法^{八百}原^{八百一}夏^{八百二}長^{八百三}と^{八百四}復^{八百五}朱^{八百六}正^{八百七}と^{八百八}ぬ^{八百九}は^{九百}以^{九百一}興^{九百二}の^{九百三}書^{九百四}
附^{九百五}し^{九百六}て^{九百七}あ^{九百八}る^{九百九}又^{一千}若^{一千一}を^{一千二}全^{一千三}印^{一千四}を^{一千五}揃^{一千六}え^{一千七}ん^{一千八}入^{一千九}ん^{二千}大^{二千一}の
大^{二千二}き^{二千三}こ^{二千四}ん^{二千五}あ^{二千六}る^{二千七}る^{二千八}大^{二千九}き^{三千}い^{三千一}もの^{三千二}に^{三千三}あ^{三千四}る^{三千五}が^{三千六}其^{三千七}の^{三千八}甚^{三千九}い^{四千}る^{四千一}

石川丈山の著し例の八分は美と十七史の著
名う書いてあるは印も三個揃しんるうある
情式三款とも刻きえんてなる、^四の^五史^六を^七と
京師心名なるを^八年^九一^十と^{十一}あ^{十二}る^{十三}未
に^{十四}海^{十五}ん^{十六}ら^{十七}う^{十八}石^{十九}と^{二十}あ^{二十一}る^{二十二}及^{二十三}ば^{二十四}多^{二十五}い^{二十六}、^{二十七}飾^{二十八}る^{二十九}も^{三十}錢
物^{三十一}と^{三十二}あ^{三十三}る^{三十四}は^{三十五}廿^{三十六}一^{三十七}史^{三十八}と^{三十九}あ^{四十}る^{四十一}は^{四十二}此^{四十三}位^{四十四}ふ^{四十五}もの^{四十六}の^{四十七}如^{四十八}う
る^{四十九}を^{五十}と^{五十一}あ^{五十二}る^{五十三}と^{五十四}困^{五十五}る^{五十六}、^{五十七}此^{五十八}の^{五十九}書^{六十}籍^{六十一}を^{六十二}書^{六十三}史^{六十四}の^{六十五}上
る^{六十六}格^{六十七}を^{六十八}大^{六十九}切^{七十}る^{七十一}材^{七十二}料^{七十三}と^{七十四}あ^{七十五}る^{七十六}、^{七十七}こ^{七十八}の^{七十九}心^{八十}を^{八十一}あ^{八十二}る^{八十三}、^{八十四}取^{八十五}の
の^{八十六}年^{八十七}月^{八十八}を^{八十九}繕^{九十}ふ^{九十一}十^{九十二}と^{九十三}帖^{九十四}と^{九十五}せ^{九十六}、^{九十七}此^{九十八}の^{九十九}大^{一百}部^{一百一}の^{一百二}歴^{一百三}史^{一百四}

早稲田大学蔵

願自今伊始每歲訂正經史各一部壽之剡棗及築削方
輿同人聞風而起議聯天下大社列十三人任經部十七人任
史部更有欲益四人并合二十一部者築舍紛々卒無定
局余唯閉戶自課已耳且幸天假奇緣身無疾病
家無外侮泰余自娛十三年如一日迨至庚辰陰曆十三部
板斬新揮架賴鉅公淵匠不惜玄晏流布寰宇不意辛
巳壬午兩歲災祲資介告竭亟棄貝耶田三百畝以充
之甲申春仲史亦寢然成帙矣豈料兵興寇莠危如累
卵分時版藉於湖邊高畔茆菴中水火魚鼠十傷
二三泮天邦地莫可誰何猶幸數年以還却岳稍寧扶

病引雛收其放失補遺亡二十七部連牀架念仍復舊觀
然校之全經其費倍蓰矣止十年之田而不償也回首丁卯
至今三十年卷帙從衡丹黃紛雜夏不知暑冬不知寒
晝不知出戶夜不知掩扉迄今頭顱如雪目睛如霧務尚乾
乾不休者惟懼夏吾毋淡書之一言也而今而後可無憾矣
竊笑棘潭假寐猶夫牧人一夢耳何崇禎之改元十二年
之空塔十七年之改步如鏡々相照不爽秋毫耶至如獎
我罪我不過夢中說夢余又豈願人之與我同夢耶

順治丙申年丙申月丙申日丙申時題于七星橋

西之汲古閣中

貴人の著述と云ふ元の如く自叙一人の手を以て年々々々しもの非
す余人親王のりも古に之を大、安麻呂等教人の傷候
い、この司馬克の通鑑と云ふ書を執ると云ふ
かみんを原行と云ふと華も亦范祖禹、劉敞等
の分撰の年々々々し上言任疏も其如く慧慈、慧聰
親勤等済文を畫して太子の徳氣を以て撰せし
もの云々云々云々

法隆寺の修験帳に上宮太子所出の任疏三卷
を載す云々云々

法隆寺任疏卷中 卷四 卷五

法隆寺任疏 一部 三卷

法隆寺任疏 一巻

○法隆寺の中沙汰の任疏に云々云々
又お七、云々云々、
嘉靖下未進士、情ぬ為者、云々云々、
川舊性、有宋槩完、後漢記、係禮放、
三君之評、飾以古錦、玉籟、遂以一美婢、
此不能也、婢臨行時、遂於壁、
志士又得、悦、傳、未、或

早稲田大學圖書館

彙編、余少孝高士延是之云とのふその行々を編刻
爰出深淵、猶能前人、授馬的、他のおるは莫愧怍、其念に
是亦傍枝

○の古法刑律を初る凡例と名をいへり、何文煥の歷
代法流の凡例と書す、故題字遵例、改言聖祖仁皇
帝廟諱、上一字作元、下一字作煥、世宗憲皇帝
廟諱、上一字作允、下一字作正、皇上御名上一字作宏、
下一字作歷、といふ、元を言ふ、煥を暉と、允
ハ胤と、正を禎と、宏ハ弘と、歷を曆と、
此を刑校と乾隆原書と、嘉慶と帝の永琮

と云ふ諱をいひ、古校を云ふは云ふ

○全唐詩選と支外、供しりる者の一也、河
世寧の考輯、男三亥校也、知不足齋叢書と云ふ
なり、其の跋をいへる支那の文人の文を
云ふ、これをいへるをいへる

全唐詩選跋

全唐詩選三冊、日本國、河世寧所輯、余得之
海商船中、以贈鮑添、飲先也、有知不足齋
叢書之刻、欲以此冊附入焉、未付梓、悵然、
今長衣法、法成父老、屬余校讐、余惟果

早稲田大學圖書館

去中華、僅三十六更、其得被四朝文余之數者久、故
其人巧耽著述、就余所見、如山井神典之七經、五子考
文、其仰物氏卿之補遺、茂竹自若、有辨名二生論
後微十卷、林羅山、有補章考、沈安三卷、天澤山人校
刊佚存叢書、古集、歐洲博而有及、援、其詩集、則
然改和、其子然、改秀之南、越、相載錄、戊亥、亦
畫、西川湖之葦、蓬、芳、詩集、詩、為、非、之、可、親、之、也、
茲、又、得、此、三、冊、則、日、本、之、文、字、因、非、海、外、他、邦、所
可、並、也、夫、全、唐、詩、多、至、數、萬、一、冊、又、平、時、盡、熟、
於、胸、中、而、後、始、始、浚、君、年、者、方、知、其、其、一、句、其、句、

為、搜、羅、未、其、者、乃、補、缺、而、官、成、之、此、豈、易、事、也、
然、則、河、世、享、之、好、子、深、思、從、一、知、矣、凡、日、本、著、述、
余、前、撰、其、書、鏡、補、一、書、凡、日、本、著、述、多、所、未、見、
是、者、亦、未、入、藝、文、志、且、幸、清、江、之、能、成、文、志、
使、中、外、得、見、所、未、見、之、書、殊、大、快、事、也、遂、識、數
語、於、其、後、

○ 陶、大、新、書、又、云、大、正、紀、十、八、年、其、書、其、書、其、書、其、書、
田、原、の、い、ま、も、其、の、書、其、の、書、其、の、書、其、の、書、其、の、書、
其、と、云、又、廿、四、年、其、の、書、其、の、書、其、の、書、其、の、書、其、の、書、

中亦有一物人、一停最勇他、豈皆天國置之教歟、
考考といふ人ききき、此人教ふニをうける人として
頭つたさき、此ころころも、此の許儀の考才とありき
す

○智囊補のりさのりさ、
親用鉄杖、即投于井中、歲取鍛鍊、一乃長
成、利不可當、今勳衛之家、世武為業、而家無鏡
刃、愚意亦宜儆此、
お七いしとみんを類函、唐順うりさのりさ
有客贈我のりさ、魚鱗次作靱青絲、重々、
重々、
重々、

海濱濱来、身上龍文雜藻荇、
顧、白日方々天、
蓋日方水、
井、日淘月煉火氣老、
此月中、
沫、
和のそこ、
良、七ろ、
陶、

早稲田大学図書館

一本合刊行の圖書を騰寫費校正費印刷費
紙製本等必要する實費の多き故に
著者の書籍出版の圖書より進んで廉
きものあり

一本合めぬりの圖書を非是をすぬり
理ゆありとも合多ふへに配をせん供し
批評と求むる物を此の如くある
一本合刊行圖書の内量と合多の多きを
しるしと差異を生ずるは合多と確を
しるしと左の比例に據ることを協会の合費

：批評の合費

合費一千五〇〇円 一月 頁

の 千五〇〇名

の 二千名

一本合めぬりの圖書を騰寫費校正費印刷費
紙製本等必要する實費の多き故に
著者の書籍出版の圖書より進んで廉
きものあり

合費 一名

評議費 若干名

理事 若干名

書記 若干名

早稲田大学図書館

史記集解と云ふことある、そのを併しお母を
書物その國書然るは、其の序に、此の書を
あつて、お母の寺、直接に買つたものと
日寺の記述の故に、一日の書、其の手、
を写つたのも、其の、
記述と、
母もあつた、日寺、元、
又あつた、
あつた、
と云ふことある、此の記述、

史記集解と云ふことある、そのを併しお母を
書物その國書然るは、其の序に、此の書を
あつて、お母の寺、直接に買つたものと
日寺の記述の故に、一日の書、其の手、
を写つたのも、其の、
記述と、
母もあつた、日寺、元、
又あつた、
あつた、
と云ふことある、此の記述、

史記

史記集解と云ふことある、そのを併しお母を
書物その國書然るは、其の序に、此の書を
あつて、お母の寺、直接に買つたものと
日寺の記述の故に、一日の書、其の手、
を写つたのも、其の、
記述と、
母もあつた、日寺、元、
又あつた、
あつた、
と云ふことある、此の記述、

早稲田大学図書館

あつた例の油桶の地をうらめし
れみ立しをきつてそつと
お扱ふ湯をふふことさつとあつて
思つた後うきえとある
えらゝあつてあつて
らん

一 杜工部集

えんえん殿があつて
梵舞の昔入らあ

一 貞和集

えんえん殿の
五山僧侶の詞藻を多く
研究材料の
とつて
五山又よを
とつて
五山又よを

一 芙蓉丹

えんえん殿の
相出の遠俊
後撰編と
えんえん殿
えんえん殿

早稲田大学図書館

早稲田丹波書庫

聖山の巻にそのこと石田三成、朝鮮征伐の途分捕る
本にそのを自らの親の也養のしる納めたるものと
事いれ六千二百五十四卷、其日支那及び朝鮮の
巻に潤くは此位の日もの、其に之を日とて、寧
ろ版本の信も、寧ろのたふいかつ、印を多く傳
けつて、平、先づ其の、潤くは、
吾内、の、元、聖、傳、ハ、
ば、唐、人、又、と、唐、人、或、其、の、人、の、
の、
の、
の、

殊に、支那、元、自、
遺物、(喜、又、)

〇〇の言行、和、
稀、
言、
い、
三、
遺、
耕、
方、

早稲田丹波書庫

白河亭のこととお妹の内親王と母の院又の法又の院を
まうそのの法もあつてつとを言ふといふことも并奉

——印徳のさういふことであつた(毒地話)

毒地の法の中にある聖法局とつと正念院と同じ

子と物とんを喜内親王の子孫とつとつとつと

東大寺の齋院とあつた二意のつと賜金を得ん

日寺とつと奉告と歎つたのつとつと正念院と同じ

くアセソウ作りである

○前田慧雲の毒地を説いたとき法をさういふ花地

吉院(聖行)とつと一切法を法説つたつとつと大分利益を

得たとまふことである、さう体あるさういふつとつと

の吉相を出現して儲けたときつとつと室を不出儀と

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

早稲田大學圖書館

解けたりつは、既解けたりひたりつは、そのと今なるは、
兵二府の事つたう、お寺の方でも却るは利ゆを志し
とまふ流に(赤地法)

○慶長勅版とまふの稀なる存するありゆえんも今と未
比えり、今も山縣守重の慶長勅版を閲する、其長
勅本と左の六行あり

- 一 錦縮版
- 一 日本書紀 神代上下
- 一 四書 白文六冊
- 一 古根歌謡名目引

一 陰霊本病

一 皇宋書類苑 續 十五冊

以上

一 守重の錦縮版あり、其長 此法版一尺餘縦八寸四分横五
寸六分畧行あり、天地軍邊左右雙邊八行十七と五字の
大寸方四分許(下の日本書紀四書古根引) 首行題目は新
刊錦縮版とあり、謹按は是朝廷法を勅版の模範也
(既版の初世は元禄五
年坊刻法字の甚くあり) 東見記は天子勅錦縮版本場
五山僧永雍及古碕作は奉謝之、永雍云思風高自楓
宸起、今入僧衣錦縮紅、古碕云、落涯叢社賜之後、

早稲田大學圖書館

要見坡西錦備才と即此邦本のふ也又細川出方家
譜の抄本よりとて根元錦備五部文考の古也
拜賜也

錦備五の故文在るあり

跋

錦備殿者東阜天隱之所編而未有刊行茲悉取載
籍文字鏤之于一梓基布流一版印一紙終改基
布則渠祿六莫不適用此規模頃去朝鮮傳達
天聽乃依彼様使工摹写焉
寂思辱在擬貞詩六義教以化之家為人誦傳之不朽

云

慶長カニ歳丁酉未則下漸 臣僧南禅靈三志為

一日本書比も長文の跋あり其の末に左の如くあり

長長己亥法洗去辰

四位下行少納言通侍從臣清原朝臣四賢殿

守重云此法版匡郭尺寸字數前ノ錦備殿ト全ク同シ唯軍
辺ニシテ界行ナキヲ異トス此本神代卷二冊ノ一藏題ヲ以テ
考ルニ是レト合部ヲ離スセラルヘキ盛三忌アリテ時僅カ
此二卷ヲ試印セラレシナルヘシ

早稲田大學圖書館

早稲田大学図書印

巻首の答題とえぬ帝の宸翰と云ふ

一四者

守重此本を四書と離進の序跋をけは又或は坊刻
の古跡を疑ふきを免んを記す也此を七とす又勅版と
云ひ傳ふるふりも今神代巻録傳紙を取て
之を乃て版式を終て一校する人其編
題者も六體を同し編く勅版をを論す
巻首副葉額面扁題書

大享慶長
巳亥刊行

浄法 益子

中 七五二此の所載

一長根歌記行合刻

守重云此本又離進の筆片序跋を
帝の勅版と云傳ふ版式を於前の三書と均く合す

早稲田大学図書印

早稲田大學圖書館

唯四周雙邊を又按ふる錦浦を其出二年の
朔版より神代書を四書と四年より北本四周双邊
より紙墨紙の良し言ふる最も後の捺印せら
るしとのうん

一 伝書抄病

ぬくりぬの勅版神代書と其の同版の綴角者ある
ことと云へる即ち是なり守書云余うんるところ
ハ其出流本を後々後刻セシ勅版より後刻
の歲月序改る其板匡七本前後を異し

総七寸一分横五寸四分四周双邊ハ行十五より紙を
紙帳僅六葉首行題目ハ陰字を病とある
下二一首集見板及後論と分注する言ふる其の
綴角者を用ひの印章と板平流版せらるへき蓋
言ふるしと紙より此の教本を捺印せらるし

一 皇末市賣類苑 十五冊

改訂と略す 年號 四書を在しぬし
之和七年 重光作罷六月晦日

早稲田大學圖書館

記述并証家の舊地最中を言とをいひしと清して
公の或る書を終する人其は今其書を出さしむ
日其書も無事とさししと行するに思ふ
仰るに依り終るを言に出さしむ

其書者の條目並に徳義の督督也をいふ御意用と
云へり

此書は十月廿五日起業十二月十日休に十月十
日より如の翌正月にあり候へり三日月後
漢方後印下候也と申し

是乃証家の異名を取らんを而い述ふ公武の流を和定

とん以て元末事あり候へり其の源をあらと
三二

又一書を三部り、言はし、事ありては、後高紀
十月廿五日五山十人南原寺於金地院諸家証
一本三部、完全書言、後一部、林あり、一部、證
一部、後、何、今、言、論、由、傳、長、老、及、其、事、之
とん、の、き、守、重、云

根、本、支、り、紀、八月、十、日、の、書、信、に、記、述、三、通、言、
扱、に、被、成、佛、証、と、い、ふ、即、ち、い、ふ、と、り、扱、に、
異、朝、唐、宋、以、來、之、の、卷、書、と、い、ふ、副、下、行、本

信田大學圖書館

の三箇(三)字入り是れ常の姿或は供とるも
ことを書かざりて也今此本の遠謀深(因)又此一
三印を言さしめらる和漢一軌とすの命
云

又借受の書類を字する他を禁して心(鄭)を
注とせし抄類を字の類字を語中(入)るる
の一考(る)を(る)と(る)と(る)と

一考(る)者抄類(る)仰(る)抄(る)能(る)又(る)被(る)思(る)と
江(る)才(る)并(る)抄(る)家(る)之(る)難(る)記(る)被(る)出(る)抄(る)秘(る)候(る)可(る)其(る)

入抄前(る)に申(る)上(る)者(る)寄(る)抄(る)神(る)啓(る)秘(る)本(る)抄(る)殊(る)可(る)為(る)
抄(る)借(る)受(る)被(る)味(る)抄(る)出(る)神(る)満(る)是(る)被(る)思(る)候(る)字(る)の
心(る)念(る)を(る)入(る)字(る)の(る)作(る)至(る)体(る)見(る)候(る)抄(る)仰(る)候(る)
可(る)抄(る)心(る)あ(る)う(る)思(る)候(る)者(る)字(る)也(る)本(る)抄(る)区(る)并(る)
て(る)抄(る)此(る)由(る)抄(る)技(る)家(る)所(る)仰(る)と(る)謹(る)言(る)

十二月三

金地院

二條抄

抄類

○又(る)本(る)抄(る)の(る)由(る)に(る)抄(る)類(る)の(る)本(る)抄(る)と(る)其(る)の(る)
抄(る)類(る)の(る)本(る)抄(る)と(る)其(る)の(る)抄(る)類(る)の(る)本(る)抄(る)と(る)其(る)の(る)

信田大學書庫

考をせしむるにあらざるの意又以て其の考を或る四史を編
纂するにあらざるを缺を補ふ其の考を以て其の考を
此の心ある意又其の考を以て其の考を以て其の考を

御文庫書新未歴志の弘文院本を以て其の考を以て其の考を
の四書む多し是を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
七撰するに其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
の教を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
の御書なる考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
是し副本を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を

一、其家の傳説也其採録の衆書皆御書なり
現存するは是を意又御書本を以て其の考を以て其の考を
其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
御書なり其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を

享保十二年九月御書物より、和古の内要用の古目
注上す(其の考)又享保三年二月十七日也来
御書物より名割の御用多きを以て御書の
考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
傳を以て其の考を以て其の考を以て其の考を以て其の考を
つ

皇田大學圖書印

重信等の様書條令右の如し以て是等の様書の一覽
を知りし

三

一 目錄之書新中御用と云ふ不_レお_レる者一の被_レ差上
候自合不_レお_レる候者家来又_レ為_レ領知之寺張_レ此
所人等_レ和_レ道_レお_レる在_レ之者於_レ者之者差上候扱
可_レ被_レ及_レ也

一 新四文_レ風土記_レ道_レ者御存_レ至_レ印_レ存_レし_レ也
但_レ風土記_レ者_レ本_レ由_レ者_レ雲_レ御_レ存_レし_レ也_レ候

一 本朝月令_レ日_レ能_レ聚_レ四_レ史_レ道_レ者_レ付_レ之_レ由_レ者_レ數_レ者_レ御_レ存_レし_レ也

二 方_レ之_レ候_レ得_レ長_レ端_レ本_レ而_レ候_レ此_レ瀬_レ喜_レ之_レ分_レ不_レお_レ候_レ者_レ一
被_レ差_レ上_レ候
一 在_レ者_レ物_レ之_レ儀_レ之_レ御_レ存_レ候_レ者_レ之_レ候_レ者_レ其_レ大_レ子_レ頭_レ又
子_レ之_レ被_レ差_レ上_レ候_レに_レ上

二 正月

目錄

新四文	本朝世記	寛平御記
延長御記	律集解	令抄
弘仁式	貞觀式	法書御存
為政抄	風土記	本朝月令

一 卷三書
五 六 其 也

皇朝御存

りきまじり此等の理由を伝ふるをある。是は浅草の
祇園の石版●元版の一切経を四巻の指定一と
その書しあるが、元を果して元版であるか平か或
かえり輯版を元版と見別れつてそののであるま
いう一版見ればこのことである

○寶印集三冊とんをみる寺の寶印を凡そ計
り集めた一種の印譜であるが、好む家も僅うある
の印版を版しつてそのものである。今でも持して
七交あるところといふのである。此のりて人の南名とい
語るが、いさむを思つてその圓くも中下の

二巻の千入るをよき上巻も千入る。この意
の玉をよむたが梵字の印も一種の風格のあるもの
である。其の尾の左のく刻してある。以つて此の古のま
ゆをあるべし。

経云我此法印为欲利益春河鉢版拾伍施銀卷百
故清勿为奇既須因任兼干時天保辛丑宗淵敬
白

○若州物修三巻とんを起らる千入る。又んが用板年
代を天和三年二月に江戸大傳馬町三丁目ころに
る出版したるものである。先づ改くい部へ入

早稲田大學
蔵書印

法を指すに及んだるを今こそあはれと書し華一のり地多
の節一を言ふらつれぬり然れども、山易と酒客と、柳
ふ味唯まゝの調子ハケサシ一にうたふと見え
重華一う招へんは折入、出しと皆いへんは見え
くまがいと云ふ不さう山易う自家の調法を詳解
一にのちあるは見えなく一さうく巧者まゝのん
例くは味唯まゝをまけぬは不可ん、遠火は
何ゆゑあまきけんはいいんあまきまは任せて置ても
困ると云ふ扱ふ極極、強弱は皆通ずるに
くとも扱ふ者あるは、第一の飛鳥よりあつても

あつても、二にたもあつても切りの満紙、第一
と云ふ字の一字昔えとあるは、其の極き謝絶し
去来うち入してあつてもその又たうと云ふ、而も古い
先づ自分う言ふ心を肢や節一をむを突めぬ力
のよいことを言ふけ、能力のあつてあつても、
具足もとも買つてはあつても、世も節一をむの言
ひあつても、まゝのりなるといふ、
下一、是を言ふ頂戴し印状と云ふは、
が、妻あつても一向売のぬと云ふ事、
此の揚つても妻あつても勿論あるは、
此の揚つても妻あつても勿論あるは、
此の揚つても妻あつても勿論あるは、

和州大蔵院

悦びある事、おと用ゆる中、しきまひ、
ふ一字をもち、魂を謝意をあらはせ、
秋の交りの名文、ひあつ、
九、此の書物、
たう終る、
此の流しの、
ん、
つ、
う、
つ、

内、
少、
ひ、
粗、
ま、
黒、
九、
ま、
換、
此、

早稲田大書院蔵

歌あつ地修入進人ひあつ

○山あつ一家の古族を傳はるる山あつ一家の系圖を志す
ハコエる名あつ生じた、昔々山あつと申すは山あつを
以て傳はるる山あつ將え凱う山あつの家圖を傳はる
る事と申すに、元々山あつと申すは山あつと申すに
ちいねん人、即ちハコエる山あつと申すは山あつと申す
の老と申すに、即ちハコエる山あつと申すは山あつと申す

明治二十六年六月十日

山あつ一家の系圖

賴氏畧系譜

正茂 通稱總兵衛

某 通稱彌七郎

良皓 通稱彌右衛門

惟清 通稱又十郎 亨翁ト號ス世々安藝國賀茂郡竹原ニ住ス

惟忠 通稱忠七郎 尾道ニ住ス孫某迄ハ同地ニ在リシガ今ハ不明

惟宣 通稱傳五郎 長兄ヲ輔ケ 公遷 通稱千藏 養堂ト號ス廣島ニテ家ヲ興セリ竹原ニ住ス 移居シ讀書ヲ生徒ニ授ク

綱 通稱常太 字ハ子常立齋ト號ス京都ニ住シ印刷ヲ業トセリ其子早ク死ス故ニ絶家

惟寬 通稱彌太郎 字ハ千秋春水ト號ス本藩ニ仕ヘ廣島ニ住ス

某 通稱岩七 早世

惟顯 通稱松三郎後チ字ノ千齡ヲ以テ行フ 昏風ト號ス父命ニ依リ竹原ニ留リテ醫ヲ業トセリ

惟柔 通稱萬四郎 字ハ千祺杏坪ト號ス本藩ニ仕ヘ廣島ニ住ス

某 通稱富三郎 早世

舜 通稱佐一郎 字ハ 某 通稱榮次郎 以下畧ス

元鼎 通稱權次郎 字ハ新甫伯父惟寬長子襄ヲ廢ス仍テ養ヒテ嗣ト爲

元彝 通稱尙平 字ハ乘甫小園ト號ス竹原花山氏ノ子ナリ 以下畧ス

襄 通稱久太郎 字ハ子成山陽ト號ス廢嫡ト爲リ京都ニ住ス

某 通稱大二郎 早世

某 通稱士郎 早世

元鼎 實ハ惟溫ノ長子惟寬ノ養嗣ト爲レリ 早世

元協 實ハ襄ノ長子ナリ元鼎沒後藩特典ヲ以テ惟寬ノ嫡孫承祖ヲ命ズ故ニ藩制ニ於テノ系ハ此ニ出ダスヲ正當トス尙襄ノ系ニ出ス

鉉 通稱三千三 字ハ君舉達堂ト號ス初メ藩覺ノ句讀師タリ後年泉州界ニ住ミ賣藥ヲ業トシ傍ヲ讀書ヲ生徒ニ授ク其家存セリト云フ

元協 通稱餘一 字ハ承緒事庵ト號ス

某 通稱辰之助 早世

復 通稱又二郎 字ハ士剛支峰ト號ス父襄京住後ノ別家 以下畧ス

醇 通稱三木三郎 字ハ子春三樹ト號ス

元啓 通稱東三郎 字ハ子明誠軒ト號ス 以下畧ス

○又今も室命と福流の形世北方の傳のこと、
北方の傳の版の不在を流し、今んは此のことはつ
き今もあきと扱めて流味のある流を——た——
そんを有る昔もつたけにるる——

北方の傳の版の大部分と纏めて京都のふふ
版のふふとそつた、是も——大橋に買入
う、つたときもそつた、永樂版もときを万回
けんが手離——ふふとそつた、その時
大橋をよハ千回もむの値をつけたい、さき
買うつらどうもそつた、あふもそつた、とそつた

とお流んとあつた、昔のふふとそつた、いと思
つた、大橋の値もつけたい、五々目の
値をつけたい、そのゆえに大橋とお流の
出来と思つた、そつた、あつた、永樂
版もそつた、——流味もそつた、乗るる
つた、其の五々目もそつた、流味もそつた、
と、のふふとあつた、そつた、教をそつた、
——つた、北方の版もそつた、あつた、
と、流味もそつた、五々目もそつた、
の流味もそつた、

を穿かざる。是れ氣長く待つてそんを来
ことひあつた

其後二人の穿平しうあうんたそんを携りて
穿つりしひある。穿を段の板敷を舟を三つ板
位とやめき。さむびの三つ板位より
とをを板に、穿いふいとそんを携りて来に
う三つ板とやめえし平しを引えに、やえ貫
板のき何のえむび三つ板の板も三つ板
の穿りえりし。なを測りてしえんあいの
こもあもろい波向うあつてあつて、るうさう

つと秋田の穿家本らあつた。北島の岡とん
一室止板し。なことあつた。此の一室をきし
北島の画をうつと飾つてあつた。即ち額や
障子屏風も。さむびの三つ板位より
つてその画帳の下に。さむびの三つ板位
さむびの穿とそんを携りて、穿きこんを
たのむ板敷し。我んも。つとあつた。えん
その久えく。北島の画版とあつた。さむ
と穿躍した。本智の誇る所。北島の穿
つてのさむび。きさうい。さむびの画版

を次の二重と装飾をば、こんを天下に傳
おーさうんと、彼んま心ちうる三の版をい
るし、二月いんことをあふ、二月の版を案
すう、三の版と表意を刻し、あふ、央は
し、引き、氣んは、三の版を得て、し、大分
ま、こんを天井と張るう用を、今し、四、五、
若干と、装飾を、統、あふ、し、四、五、
丸、形、ま、ま、を、箱、あ、こ、う、ん、豆、柳、ま、ま、
火、鉢、ま、ま、あ、う、ん、テ、ー、カ、ル、ま、ま、
ん、一、切、の、装、飾、材、料、一、二、比、お、の、版、を、取、る、而

し、二、三、の、材、料、の、價、を、三、千、四、百、三、千、四、百、
百、の、些、の、の、ま、ま、あ、う、う、と、ま、ま、
あ、を、用、ゆ、ま、ま、三、千、四、百、と、ま、ま、
あ、う、ま、ま、ま、ま、大、ま、ま、
三、千、四、百、と、ま、ま、
と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

○是の二重と装飾の二重、後、ま、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、

和歌山県立歴史博物館

と往來するも白名行をりてなとまゝにさしおのひあ
系譜亦し甲申圖のお入に申すと見えしは白名の
花にひあつたて見えしは天壽寺花書に
と申す印に括りつて見る(のりて)二月十日の
三)

○珠珀各心族の申二類と見えしはそと見え
七支もくし丹と申すもさうく譲つて
見えしはくし申すもさうく譲つて見えしは
七支もくし申すもさうく譲つて見えしは
くし申すもさうく譲つて見えしは

ひさし珠珀各心族の申二類と見えしはそと見え
七支もくし丹と申すもさうく譲つて見えしは



あつたて見えしは
七支もくし申すも
さうく譲つて見え
しは

○静美あつたて見えしは天壽寺花書に
と申す印に括りつて見る(のりて)二月十日の
三)

静美あつたて見えしは天壽寺花書に
と申す印に括りつて見る(のりて)二月十日の
三)

七〇〇即ち梁の代の... 逸し獨り... 今此の書... 本の未歴... の...
七〇〇即ち梁の代の... 逸し獨り... 今此の書... 本の未歴... の...

喪服小記子本義

○日本現在書目云

礼記子本義疏百卷

梁四子助教 皇信撰

按書目藤原信世撰也信世仕宇多

原本信字作信 字書先世字恐 誤字待後考

醍醐兩朝藤氏中以儒有各于世云

○隋書卷三十二經籍志才二十七云

喪服小記目十三卷 皇侃撰

礼記義疏九十九卷 日

礼記講疏四十八卷 日

○唐書卷五十七藝文志才四十七云

皇侃礼記講疏一百卷又義疏五十卷

喪服文句十卷

案隋唐二書載皇侃著書目如斯宋史以下無見然則皇侃著書漢土蚤失其傳已

久可知矣所存雖二篇可以為至寶也今得
觀此等書是六我 皇統一系萬世無革命
國體之恩賜也若使漢土人視之則云歐陽
脩所謂逸書百篇今猶存之言果不欺人
記之以補經籍訪古志云爾 明治二十三年

四月 島田蕃根識

此の一書と珠璣をうらうこの心ある一吾人の修
子やうゆんは七と法隆寺のありはとて之は
法隆寺のありの古とせよ 日契之をいへしと云
く又此の一書と支那の物と油とをいへしと云

此のと蕃根の持しむの心ありと云ふ子ありは
之をいへしと云ふと云ふの心ありと云ふ
と云ふと云ふと云ふの心ありと云ふ

え来待ちを支那くえせしと云ふ
をさるあつて夫と云ふと云ふと云ふ
ゆと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふ

はらひ朝の始に此の支那の心あり
と云ふと云ふと云ふと云ふ
まると云ふと云ふと云ふと云ふ

島田蕃根

皇朝書目録

此天の命し以て漢文を漢羅くも
八皇氏之重なる地たる廟笑るく且つ
娼妓之象龍窟もとて龍 軒之統
つるも古刹之文をも取て是地實之地也
とあり洲邊のしるも龍窟をえりて
右の所を教人しるも龍窟をえりて

四ノ林下 道下中

の中一箇字 作史

此古来服之記子本疏義未正十九其ともと持てま買

歌の紙系千尋本をとらふ、其尾に内家私印の
印あり

すくちの記はのりありて此玉印本
二書を得りて是し高山寺に傳りあり
とて支那の供へしひとも我らに伝るる
因りて稀代の物也知れりて此印本
果るる不なれも同一の記のしるはしこ
の礼記義疏を傳へしとあるとやうなる
と由なるなりとて一寧ろ傳へしは此
印を傳へしとて一寧ろ傳へしは此

皇朝書目録

あつたはるは心此中法親の修家の集う所人を
揃へるを此處に法人の又之を心ある世々を
あつたはるは心此中法親の修家の集う所人を
揃へるを此處に法人の又之を心ある世々を

○早稲田の法親の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

く五つてすまじけと認つてを心（和刻）の心（和刻）
と心（和刻）の心（和刻）の大徳の心（和刻）の心（和刻）
（る徳の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

英の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

大徳の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

徳正の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

大徳の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

大徳の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

徳正の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

この位（和刻）の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）
十位（和刻）の心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）
上）

○寺の（漢杜子名）と法親の心（和刻）の心（和刻）
くの心（和刻）の心（和刻）の心（和刻）

早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸

人ひあつて平山行花のこときあらう大分言花の
を果んそら比後ひあつそらあ没して其代り花
とささし後神より上らうう比のひあつ、特花
梅あつても言花のこ時合ひといひあつ
比らしい、日本ひ一書ふ加えり花解
を言つ比のり特花ひあつ言花のこをさえ
と備花をさへあ比のり特花も梅あつ
傍ら比のり一年もささしと花術
及の言花梅あつ其あつとささしと
うんた、ささを梅あつと特花をささつと購ひ

花してささし言花の固太いこととささ
くささしに女言花のこを梅あつとさ
ふ花のこえり言花のこを梅あつとさ
流ひあつ、と梅あつと人ささしを梅あつと入
母の子を切り梅あつと梅あつとささしとさ
言花の流ひあつ、又或る流ひ言花のこ
一人を梅あつと梅あつと梅あつと
し、梅あつと其言花のこ梅あつと
梅あつと梅あつと梅あつと梅あつと
梅あつと梅あつと梅あつと梅あつと

早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸
早稲田丸

る高もふも知れんりむあふ支那の物あは思ふとも
え法とてあはれふらいつのそをえとも名は持あま
ら所し(こ)貝の本を神又入るること
ふりあつたとすゆも神法各主人七魂つてそ
西都あふ又の流し七出に北の人つた言を傳道
しに流しと前もあえはつ寺田のまあふと
んれ法をえとる作至(四)そうあは斯るうしと
る精色しはとのあつんまんまて又者の鑑定
るもゆさうり精しうにそのそるん入修るそ又
者も歴(三)まふめを得るが母のやし

西都うはつれそ又あをむつるそあはる人
いくらもあふまふらうらも中先歎ふ西都や
言命とせぬ振うんはこしうあふ又の改中
しそああひそああのそ又者を示し西都の鑑
定を流るにんそ言命と一旦鑑定しはあ
ひらうし附爰う貼つてあうむにう西都を
一ううつまにんそ誰への歴る作そふそんを
一うあしにの流石の言命と何ああ道の
そ又者をえたとすそあ流つてそる日き
七口う開うらうらにまあ流して西都とあ

集えしつぬる出ると申すのそのつとていさ
んちとて其ていもいあのとらもつ
疑いを容んて事部
自分の作つたものかおあてぬあつとてあて天
つてならたえし
十月十ちる又あつと

○前の山森を花の坊ふちていきを説く
こゝちとて海ええとていもいも其の直
流ひあつとていもいもいもいもいもいも
と説くといふと大判やあおを指すといふ
と即ちい傷りい傷りい傷りい傷りい傷りい傷り

いふに物子の跡合建表といふものあつとて
比其申うとたえもあつと特を抜るといふ
う傷りらとをいふといふいふいふいふいふ

○内家和印の印を物を言うあつとていもいも
の地倉院の印い天平一頃の印あつとていもいも
いもいもいもいもいもいもいもいもいも

○遠古花の印を物あつとていもいもいも
あつとていもいもいもいもいもいもいも
を指すといふものいもいもいもいもいも
いもいもいもいもいもいもいもいもいも

まゝおろしきものも一はまに代換する由りあるもの
と云ひし一うまの代換せしむるものありきと云
はししも終る所の不慮の故を以て大なる辨はさ
りしれども其の故は美術熱生るゝの故也
たす御井の此等物ありし由り出せしは此の
故也一しこの由りあるものありしは此の
りとはまゝのものと原物の古く懸るゝは此の
終る物を言ひしは此の由りあるものありし
り御井の代換せしむる由りあるものありし
はまゝの代換せしむる由りあるものありし

和蘭書

田中訥言の飛字の幅一尺四方なるものと
御井の法橋の教士尾張の人平安の信を
るに於ては其の書帳を以て之を授けし
御文の格を詳しむるに此人の石を以てし
て一之の文を以てし自又も信由一其書の
人の代りしもの也

田中訥言の代換の事也而して此の由りあるもの
ありしは御井の代換せしむる由りあるものありし
はまゝの代換せしむる由りあるものありし

和蘭書

也(内)は十月廿五日
の傳に良采が千巻と千巻と傳へるを
の歌を佛土切徳住と守部守徳を
又一部あると云ふは縁山の徹定
んを摹写刻し馬志ある興えれこと
今も河にありとの余のそりて
とあるが其の原書はわが
籍にあると云ふは井上保
一本をあると云ふは
一時を正すは

いまは西野の文は
おしと云ふと同書
まうく新の
あつと云ふと
ゆきと云ふと
○新の
の
方守
的
州

在羅抄了能日... 即多海井の八休... 丹津を幣... 凡三十卷... 流るる言ふ... 海に

一千里水面

二軸

也母名流るる家の方腹を集め光祿院

難

一曰

三軸

一頼家考稿

三軸

山陽の考稿二卷
又山陽の考稿二卷
取

一 乃方人士考稿

一軸

乃方人士考稿の考稿... 乃方人士考稿の考稿... 乃方人士考稿の考稿...

一 二又候考稿

一軸

二又候考稿の考稿...

一 正玄為考稿

三軸

正玄為考稿の考稿... 正玄為考稿の考稿... 正玄為考稿の考稿...

一 三海考稿

一軸

一 中三候考稿

二軸

一 杉陽考稿

一軸

野口松陽の考稿
一軸

野口松陽の父也
野口松陽の考稿

一 印 語 三軸 日本代印語一軸 外語印語

一 墨江圖 指巻 一軸

一 月漸圖 指巻 一軸

卷首の墨江の智恵の事
畫 木公 院山中に在る

その書は家傳の事と云後しふいふこと
ゆゑを記す跡より新圖の事の二箇の尺牘を
すゑ上出来の事と云ふこと余の抄本も病の
潮を伝へて補ふ事と云ふ事自今と云ふ事
の事跡を

ひじきささくしもの命を収めよ又定ける軸を
蓄積した位にあるが圖もも 右の事跡を
了るる事跡を満すは

此の休意海や花の事跡を端端各々指し示す
示さううんたの事跡を特記する事と云ふ事
一 此の事跡は余の事跡を指し示す事跡を
ひある事跡をいふ事跡を指し示す事跡を
るの尺牘を集めると云ふ事跡を指し示す事跡を
と云ふ事跡を指し示す事跡を指し示す事跡を
あつた事跡を指し示す事跡を指し示す事跡を

節酒樽書甘素分青燈
隨伴五十春一朝主去
歸西庫別浦情如
送故人 賈書



昭和甲午 大泉源史



和日大學圖書會

和日大學圖書會

以下全て
白紙

明治三十八年四月
廿三日起筆

春城閑人